

## かき フジコナカイガラムシについて



図1 雌成虫

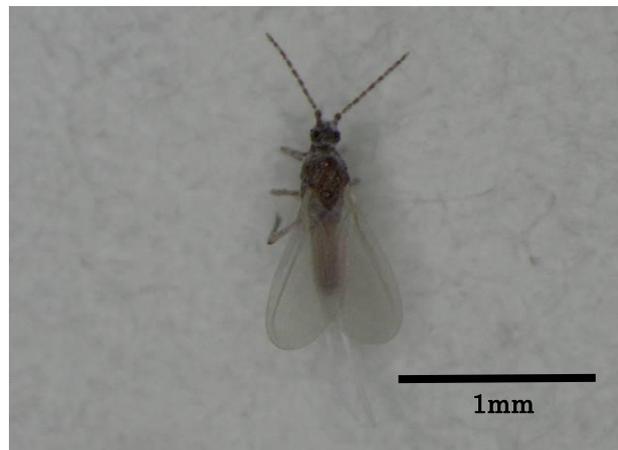


図2 雄成虫

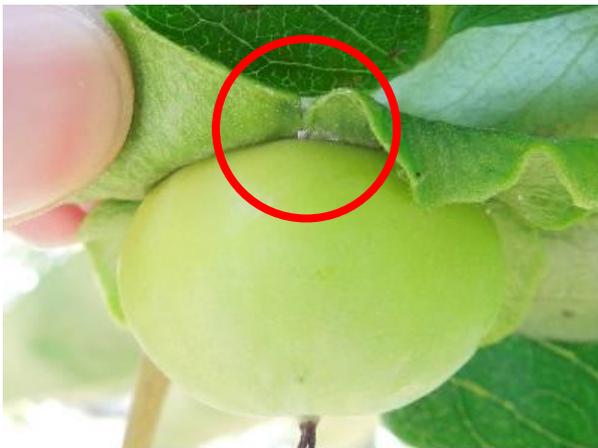


図3 幼果への寄生 (○内)



図4 排せつ物に発生したすす病

### 1 生態

フジコナカイガラムシはかきをはじめ、ナシ、カンキツ、ブドウなどの果樹のほか、プラタナスやフジといった花木類も加害する多犯性の害虫である。

本虫の成虫は雌雄で大きく形状が異なる。雌成虫(図1)は体長約2.5mm~4mm、体色は暗褐色で背中には白色のろう状物質に覆われている。体周辺部には18対の突起があり、特に後部の突起は大きい。雄は幼虫、前蛹、蛹を経て翅をもつ成虫(図2)となる。雄成虫は体長約1mm、体色は暗褐色~褐色である。

幼虫および雌成虫は芽、花蕾、果実、葉、枝、幹の樹皮下などあらゆる部位に寄生し(図3)、吸汁する。特に果実とヘタの隙間や、枝のくぼみや粗皮の隙間などに好んで寄生する。群生することが多く、果実に寄生すると排せつ物にすす病(図4)が発生し、品質低下を招く。

## 2 発生状況

フジコナカイガラムシは年3回発生する。越冬は1～2齢幼虫で粗皮下などで行う。越冬幼虫は3月下旬頃より越冬場所から新芽や新梢などに移動し加害する。越冬幼虫は5月頃に成虫となり産卵する。

第1世代幼虫は6月中旬から、第2世代幼虫は7月下旬からみられる。第3世代幼虫は9月上旬頃から発生するが、2～3齢となると粗皮下などへ移動し越冬する。

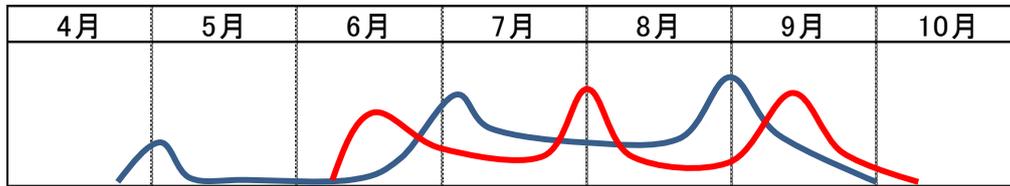


図5 フジコナカイガラムシ発生消長 (—成虫 —幼虫)

## 3 防除対策

本虫は、卵のう、2・3齢幼虫、雌成虫とろう状物質特に覆われているため、本体に薬剤がかかりにくいため、薬剤による防除のみで密度低下を図ることが困難である。このため、耕種的防除を含めた総合的な防除を行う必要がある。

### (1) フェロモントラップ調査による適期防除

フェロモントラップにより雄成虫の発生消長を把握し、発生最盛期より有効積算温度を用いて、次世代幼虫発生期が把握することができる。

### (2) 粗皮削り

越冬は粗皮下などで行なわれるため、粗皮削りを丁寧に行う。なお、地際部においても越冬しているため、株元まで削り残しの無いようにする。

### (3) 薬剤防除

#### ・交信かく乱剤の利用

合成性フェロモンを利用した交信かく乱剤が農薬登録された。本剤は設置が容易で省力化に寄与するだけでなく、対象害虫の密度抑制に重要な天敵類への影響がほとんどない。そのため、総合的病害虫管理 (IPM) を推進するうえで、積極的な活用が期待されている。

#### ・薬剤散布

カメムシ類などの防除のため、合成ピレスロイド剤を多用すると翌年発生が多くなるため注意する。防除適期は幼虫期であるが、2齢幼虫となると、ろう状物質に覆われ薬剤効果が劣るため、ふ化直後の1齢幼虫期に防除を行う。特に第1世代は孵化期がそろいやすいため薬剤防除に適している。

#### ・樹幹塗布

春期 (発芽前～発芽期) に主幹から主枝の粗皮を環状に剥ぎ、希釈した薬液を刷毛により塗布する。使用後に降雨があると薬剤が流亡するため、数日好天が連続するときに行う。

#### ・冬期 (休眠期) 防除

マシン油によって防除を行う場合はかけムラの無いよう丁寧に行う。